

地震災害後の遺産観光

— ジャワ島中部地域の調査から —

瀬川真平

要旨

インドネシアの多様な文化や豊かな自然は国外からの観光客を惹きつける。インドネシアでは、1990年代後半から、「アジア通貨危機」とそれに続く長期体制の瓦解、さらに民族的、宗教的な争乱、そして自然災害が頻発した。国内社会の政治・経済の安定を揺るがす混乱は国際観光に大きな影響を及ぼす。観光資源と観光インフラと観光関連産業などに多大の損害をもたらし、さらにこの出来事についてのニュースが海外で盛んに報じられて観光客の訪問をためらわせている。

ジャワ島中部のジョグジャカルタとその近辺は歴史遺産・宮廷文化と歌舞工芸・自然景観などに恵まれ、観光を重要な収入源とする地域である。2006年5月27日、この地域を激しい地震が襲い、多大の人的、物的な被害をもたらした。観光に関連して暮らす人たちも大きな打撃を被った。

拙稿では、インドネシアにおける観光開発の背景を概観したうえで、大災害から3ヶ月後のジャワ島中部地域における観光についての知見を記録し、今後の課題を提示する。

Abstract

Indonesia is rich in tourism attractions ranging from ethnic folklores to tropical forest trekking which fascinate tourists from abroad. The government has promoted tourism to accelerate the economic development and to achieve the national integration.

Since the late 1990s, however, Indonesia has been annoyed with continuing social disorder brought about by a series of political and economic disturbances and repeated natural disasters. The unstable social conditions severely reflect the international tourism in the apparent decline of in-coming foreign tourists.

Yogyakarta and its vicinity in Java, with a wide variety of historical, cultural

and natural attractions being concentrated, is the region where tourism is one of the major sources of income. In the morning of May 27th, 2006, a severe earthquake struck this area and resulted in enormous human and material losses. Tourism also suffered serious damages. What impact has the disaster left on locals, especially those who live barely on international tourism as petty souvenir vendors, guides, heritage park workers?

This paper will outline the development of tourism in Indonesia and note some observations in the field trip I made in central Java in August, 2006, three months after the earthquake.

Key words : world heritage, earthquake, enclosed tourism space, central Java
キーワード : 世界遺産、地震、囲い込まれた観光空間、ジャワ島中部地域

I. はじめに

インドネシアは広大で変化に富む国土に多様な民族集団をもち、さまざまなタイプの観光と観光資源の展示場である。海浜リゾートと古代文明の遺跡、多彩なエスニック文化と火山の探訪、宮廷の歌舞音曲と熱帯林トレッキングなど、歴史・文化・自然に関連する多数の「魅力」が国外からの観光客を惹きつける。観光は、インドネシアにとって鉱物資源・農林水産品・繊維製品などの輸出と並ぶ重要な外貨の稼ぎ手である。

一方、インドネシアでは、1990年代後半から、いわゆる「通貨危機」とそれにつづくスハルト元大統領の長期統治体制の瓦解、さらに国内の政治・経済・社会の安定を揺るがす争乱や事件や自然災害などがあいついだ。このような災害や政治変動や騒乱などは、当然ながら国際観光にたいして大きな影響をもつ。観光資源と観光インフラと観光関連産業などに多大の物的、経済的な被害を与え、さらにそうした諸々の出来事についてのニュースが海外のマスメディアでも盛んに報じられ、国外からの観光客の訪問をためらわせる結果となる。地震や災害は直接的間接的に観光に関連して暮らす人たちやその周囲の人たちも含

めて大きな打撃を与えた。

拙稿では、インドシアにおける観光開発の背景を概観し、大規模災害や国家的な危機の直後のジャワ島中部地域の観光の現況について、おもに世界遺産観光を中心に若干の知見を整理しておきたい。本プロジェクトに加わるに際して、筆者はインドネシア、ジャワ島中部地域を研究の候補地の一つに考え、フィールドトリップを行う予定をしていた。ところが、後述するように、2006年5月にこの地域で大きな地震が発生した。地震の後のしばらくは、8月にこのプランを実行してもよいのかどうか逡巡した。しかし、最終的には、出かけてみることにした。

なお、現地では、チャーターした自動車のドライバー、観光地での土産物売り・ガイド・飲食店店員、世界遺産公園などの施設職員などとの雑談は、おおむねインドネシア語で行った。また、現地で採用した大学院生クラスの調査補助員はジャワ語の通訳も行ってくれた。

Ⅱ. インドネシアにおける国際観光の奨励

1. 「開発」と観光の奨励

インドネシアで外国からの観光客を受け入れが盛んに奨励されるようになるのは、1970年代である。1967年から政権についた2代目大統領スハルトの統治下、69年の第1次五カ年計画において、観光開発という方針が打ち出され、国内10カ所の重点地域が指定された。なかでも、バリ島、スラウェシ島トラジャ高原、スマトラ島北部トバ湖地域、そしてジャワ島のジョグジャカルタ¹⁾とその周辺地域などが重要な観光地と位置づけられた²⁾。

観光の促進には、二つの大きな政治的課題の実現という意図が備わっていた。まずそれは「開発 pembangunan」、つまり経済開発の一方策であった。一般に観光産業は、経済開発の方策としては、①資源の調達が容易で、②初期の資本投資としてはホテルや道路などのインフラ建設の費用程度で相対的に少なくて

すみ、③労働集約産業ゆえに雇用の拡大をはかることができ、それゆえに④地方の開発の手段としても手っ取り早い。さらに、観光は所得の平等化、雇用機会、事業機会の拡大にも結びつくと考えられた。

1980年代になると、観光がよりいっそう奨励され重要な経済部門になる。観光が外貨獲得の有効な手段として認知されたのである。1983年には政府は次の5点を打ち出した。

- ①観光目的の入国に対するヴィザ廃止
- ②飛行機や港など出入国窓口の拡大
- ③ガイドも含めた港やホテルのサービス向上
- ④企業（ホテル）誘致
- ⑤観光に関する専門学校の設置

1980年代中頃には、世界市場における石油・天然ガスの価格が暴落し、その輸出に依存していたインドネシアは大きな影響を受けた。1986年9月12日には、通貨ルピアの切り下げが試みられた。大統領が観光産業の促進を指示し、それを受けて観光局長が外国人観光客は「金の山、その掘り起こし」を号令した。

1986年には、他の東南アジア諸国とともに「アセアン諸国訪問年（Visit ASEAN Year）」の活動にも加わり、インドネシア観光のプロモーションを行なった。1990年代以後も、観光産業を外貨獲得のための一つの柱との位置づけを強く踏襲し、「インドネシア訪問年（Visit Indonesia Year）」（1991年）、「インドネシア訪問10年（Visit Indonesia Decade）」（1991～2000年）などの外国人観光客誘致のキャンペーンを次々に行なってきた。

ところで、観光の促進によって実現が期待される政治的課題にはもう一つある。それは経済開発や外貨の獲得などの数字化できる課題というよりも、より文化政治的な課題である。そこにはさらに二つのテーマがある。まず対外的には、国際観光をとおして、インドネシアが経済的繁栄、政治的安定、文化的進歩を兼ね備えた国として諸外国の敬意を得ることが目論まれている [Dahles 2001]。つまり、観光を通じた現代世界との同時代性の主張といってもよいで

あろう。現代の世界になかに自国を正当に位置づけるための役割を国際観光に付与している。

さらに、もう一方、国内的には、観光は国民統合を進めるために奨励されてきた。つまり、観光の促進によって、インドネシアの国民自身に自国の文化・歴史・自然などへの意識を醸成し、政府がお膳だてをする価値を奨励、定着させ、国民としてのアイデンティティを育む、またはそうしたことを推進することが意図されている。「国民教育」の手段としての観光の促進である。政府の観光担当省庁は、かつての「観光郵便電気通信省」から、2000年頃からの行政改革とともに、同省と「教育文化省」の改組再編された「観光文化省」が主管するようになった。観光の位置が「文化」と結びつけて明確にされつつ、部局の強化が計られたのである。つまり、観光は、国民国家としてのインドネシアのイメージを、国内外に向けて構築あるいは再構築するうえで重要な役割を果たしている。

2. 近年の国内の混乱と観光の停滞

インドネシアでは、1997～98年のインドネシアを含むアジア諸国の「通過危機」と、それに続いた「スハルト体制」の崩壊や社会的混乱、さらに東ティモールやアチェ特別州の分離独立闘争、マルク州アンボン地域での宗教紛争、パプア州（当時はイリアンジャヤ州）などの争乱などが相次ぎ、1998年以降の観

東南アジア諸国と日本への国際観光客
到着数・主要国間での順位・収入(1999年)

マレーシア	1022万人 (16位)	US\$ 16.2億
タイ	960万人 (20位)	US\$ 47.1億
シンガポール	692万人 (22位)	US\$ 7.9億
インドネシア	506万人 (32位)	US\$ 17.8億
日本	476万人 (36位)	US\$ 285.1億

(Asean-Japan Centre より)

光客数は伸び悩んでいた。1999年に外国からのインドネシアへの旅行者は、かろうじて500万人を超えた³⁾。

しかしながら、21世紀に入ってまもなく、国内の政治的混乱や争乱が落ち着きかけてようやく観光客が戻りかけた頃に、またもやショッキングな出来事が起きた。2002年10月のバリ島のテロ爆破事件である。外国人観光客を標的にしたイスラム原理主義者の仕業であるとされている。2001年9月1日のアメリカ本土での自爆テロなどに次ぐ一連のインドネシア国内での爆破事件の始まりであった。オーストラリア人をはじめとする外国人観光客の犠牲者をみたが、多くのバリ人も巻き添えになった。

「通貨危機」と32年間におよぶスハルト体制の崩壊に伴う混乱、相次いだ爆弾テロに加えて、スマトラ島北部アチェ州で発生した地震と津波(2004年12月)、北スマトラ州インド洋沖のニアス島での地震(2005年3月)、ジャワ島中部ジョクジャカルタ沖で起こった地震(2006年5月)、ジャワ島中央部南部パンガングランでの津波(2006年7月)など、大きな犠牲をともなう自然災害が繰り返し続いた。これらの出来事の総和として、国際社会でのインドネシアの国際的なイメージは悪化した。インドネシア全体では、2006年の外国人観光客は約480万人、観光収入総額は43.8億米ドルで、05年の45億ドルよりわずかに減少をみた(国内観光客からの観光収入は78.6兆ルピア、前年比で1.5%の増加)。

2004年2月から観光目的の訪問に際し、「到着時ヴィザ(visa on arrival)」の取得が要件となった。すなわち、特定の13の空港・海港から観光目的で入国する際に、到着時に入国審査の直前にヴィザを取得することが義務づけられた⁴⁾。滞在が5日以内なら10米ドル、5日以上(最長は30日間)なら25米ドルの手数料が必要である。先述のように、1980年代以来、観光目的の入国者にはヴィザなしで2ヶ月間の滞在が認められていた。にもかかわらず、政府は外国人観光客の減少と観光客からの収入確保との狭間で、国内外の民間の観光関連事業者などの猛烈な反対を押さえ、有料のヴィザ取得を決めたのである。

Ⅲ. 観光地としてのジョグジャカルタ・ジャワ島中部地域

ジャワ島中央部のジョグジャカルタはジャワの歴史と文化の中心地、「The Heart of Java」ともいわれる。この町はジャワ最後のイスラム系王朝マタラムのスルタン（イスラム教系の統治者）が今なお州知事を務め、州都ジョグジャカルタ市は250年の歴史をもつ古都である。

市内および周囲には、観光資源が豊富にそなわっている。市内には、スルトンの宮廷 *kraton*、博物館、伝統的な舞踊や影絵人形劇 *wayang kulit* の劇場、バティック *batik*（ろうけつ染めの綿布。更紗）や銀細工などの工芸品の工房、土産物の商店やレストラン・カフェ、そしてホテルや安価なゲストハウスなどが集積する。首都ジャカルタでは禁止されてしまったベチャ（自転車の前部に2人用の座席をとりつけた乗り物）、また「アジア途上国都市のインフォーマル経済」を代表する職業であったベチャやドカール（二輪の小型馬車）のような、その地の人々にはよく親しまれた交通手段が、異郷を彩る風物にもなる。州南部、インド洋に面するパラントリティス海岸もよく知られている。

一方、近隣地域—正確には、隣接する中ジャワ州域内—には、有名なボロブドゥール仏教遺跡、プランバナヒンドゥー教寺院群遺跡をはじめとして、他にも8～10世紀頃の古代遺跡が点在する。カリウラン森林公園や活火山ムラピ、中ジャワ州第2の都市でマタラム国の発祥地スラカルタ（ソロ）の宮廷などへも、ジョグジャカルタ市から容易に訪れることができる。

ジョグジャカルタ地域は農業と観光で成り立っている。この地域に大きな企業は少なく、大半を占める中小の企業のうち「約40%が観光、民芸品関連で、40%は農業関連」[『じゃかるた新聞』2006年9月14日]である。観光において、たとえばバリ島など海浜リゾートの観光開発に比べると、中小の資本によるインドネシア国内系の資本によるところが大きい。

別の角度から観光地としてのジョグジャカルタを中心とする中部ジャワを見てみる。現代の「国史」という観点からすると、ジョグジャカルタは独特の位

置にある。この町は「コタ・ブルジュアンガン*Kota Perjuangan*つまり「闘争の都市」[たとえば、Indonesian Tourist Promotion Board nd. p.164、など]と呼ばれる。「闘争」とは、オランダ植民地支配からの独立解放の戦いを指す。1945年8月、日本が連合軍にたいして無条件降伏をする。日本の陸軍海軍は約3年半にわたってオランダ領を占領していたが、日本の敗戦と同時にオランダが主権を主張して再上陸した。そこから、4年余りの独立戦争が展開される。その間、インドネシア人の活動家たちは、首都機能を植民地時代の首都バタヴィア(現在の首都ジャカルタ)からジョグジャカルタに移し、独立宣言後の国家の体を確保しようとしたのである。このように、ジョグジャカルタは現代インドネシア国家の成立にまつわる重要な地域なのである。

また、そうした解放闘争への貢献ゆえに、ジョグジャカルタは特別州の地位を与えられ、州の知事はこの地のマタラム王家のスルタン(イスラム教の統治者)(ハメンクブウォノ家)が兼任するという、他の州とは異なる機構をもつ。

そしてまた、ジョグジャカルタとジャワ島中部地域は、多民族国家インドネシアの公的な「多様性」を構成する一つのローカル、エスニックな文化としてのジャワ文化の中心という側面がある。さらに、国内の他のローカル、エスニックな諸文化とはいささか異なり、当地域はインドネシア文化の中心地・誕生地の地としても位置づけられている。今に残る多数の古代の寺院遺跡(チャンディ*candi*と呼ばれる)がその証明であるとされてきた。ちなみに、それらの古代文明の遺跡が今日の国際国内観光の重要な資源となっている。また「インドネシア文化の中心としてのジャワ」という位置づけは、最大の人口規模をもち、政治軍事の分野に人材を輩出したエスニック集団、ジャワ人⁵⁾による、ジャワ中心主義的な指向と並行するともいえる。

インドネシア人はいうまでもなく、多くの外国人がこの地域に惹き付けられ、繰り返し訪れる人も少なくない。1997～98年のいわゆる「アジア通貨危機」以前には、年間およそ30万人の外国人観光客が訪れる国際観光地域であった。また、ジョグジャカルタの空港は、ありふれた地方空港といった趣と規模ながら

も、シンガポールとの間に直行の国際路線が就航している（つまり、首都のジャカルタを経ずに来ることができる）。

2005年のジョグジャカルタへの外国人観光客は「通貨危機」前の半分にも満たない14万人」[『じゃかるた新聞』2006年8月1日]にとどまった。ジョグジャカルタを訪れる国内観光客は増加しつつあるものの、全体としての観光は「通貨危機」からずっと回復していない。

2006年には、ジョグジャカルタを含むジャワ島中部地域では、4月以来、いくつもの自然災害が相次いだ。4月に活火山ムラピ（2914m）の噴火活動が活発になった。それ自体は好奇心の強い観光客を多少は引きつける効果はあったかもしれないが、警戒警報が発令され、接近が難しくなった。追い打ちをかけるように、5月27日、ジャワ島中部をマグニチュード6.3の地震が襲った。最終的には、「死者5,730人、負傷者3万7000人以上、住宅の倒壊約14万6000戸、損壊46万戸以上」[『毎日新聞』2006年11月29日]など、人命や経済に大きな被害をもたらした。また、観光資源である遺跡群、ホテル、土産物製造業などの損壊、その他、観光産業に大きな影響を与えた。2006年4月、10年近くにわたってたびたび繰り返される騒乱や災害から国際観光の回復をもくろんで、政府はインドネシアを訪れる外国人観光客数を「2009年には1000万人を目標とし、2007年にはツーリズム・サミット開催」[*Media Indonesia on-line* 2006年4月21日]と、声高に叫んでいた。地震はその直後のことであった。またさらに、同年7月にはジョグジャカルタの海岸部の西方に位置する海浜リゾート地、パンガンダラン沖合で津波が発生、沿岸の集落や住民に大きな被害が出た。そうしたニュースが海外のマスメディアでも盛んに報じられたために、観光客の足はますます遠のいた。

筆者が訪れた2006年8月は、地震からちょうど3ヶ月を経たときで、ジョグジャカルタ中心街にもその傷跡が見られたし、ヨーロッパ系のあるホテルは修復工事のため閉鎖中であった。郊外の地震の被害が大きかった地域では、仮小屋のような粗末な住宅に住む人々も少なくなく、外国の医療救助チーム（筆者

が見たのはキューバからの支援団の仮設病院)も活動していた。外国人観光客の数がまだ回復していないのは当然と言えば当然でもあった。

IV. ボロブドゥール・プランバナンの遺跡にて一囲い込まれる遺産観光一

1. 二つの文化遺産

中部ジャワ地域を代表する二つの文化遺産、ボロブドゥールとプランバナンを訪れる多くの観光客は、ジョグジャカルタ市内に宿をとる場合が多い。ジョグジャカルタ市から北西に延びる幹線を、国軍士官学校が所在するので知られる中ジャワ州マグラランに向かって車で1時間ほど走ると、世界最大級の大乗仏教の遺跡、巨大なボロブドゥール(Borobudur)がある。構造は3部からなり、最下部に5層の同心の正方形の石柵、3層の同心円の基壇をともなう円錐の主部、そして最上部の記念碑的なストゥーパで構成される。石柵の回廊の壁面には仏陀の生涯や教えの浮き彫りがぎっしり刻まれている。主部の同心円層には72体の仏陀の石像が配置されている。

日本でもよく知られるこの遺跡は、紀元8～9世紀にこの地方を支配したスマトラ島起源のサイレントラ王朝によって築かれたとされるが、これがそもそも何なのか、どのような目的で築かれたのか明らかでない点も多い。オランダ植民地時代の1814年に見つかり掘り出されるまで、大半が地中に埋もれていた。赤道直下の強烈な日差しと熱帯の激しい降雨から守られてきたのは、1000年以上前のムラピ山の噴火で火山灰に覆われていたからとも言われる。

ボロブドゥールは1970年代初期からユネスコや日本の援助や協力で修復が始まり、二十数億円と10年余りの年月をかけ1983年に完了した。しかし、修復後は人為的な破壊に悩まされ続けた。たとえば、1985年にはイスラム教急進派の一部が爆破された。また、一時、石仏像や回廊壁面のレリーフが盗まれることも少なくなかったとも言われる。

一方、ジョグジャカルタから中ジャワ州スラカルタ(ソロ)市に向かう幹線

を東に向かって約18キロメートル、同州クラテン県には、インドネシアを含めた東南アジア地域で最大のヒンドゥー寺院群であるプランバナナ（Prambanan）が立地する。10世紀に建立され、シヴァ神を祀る高さ47メートルのロロジョングラン（「瘦身の乙女」の意味）塔を中心に、ヴィシヌ・ブラフマの3神とそれに仕える獣神に捧げられた塔3基からなる。建立後ほどなく何らかの理由で見捨てられ、崩れだしたと推測されている。1000年の時を経てオランダ時代の1937年に修復が始まり、日本統治期、独立戦争期などの混乱を経て、1953年に中心的な建物の修復は一段落した。また、プランバナナ遺跡公園の敷地内には別のいくつかの石造の寺院もある。

ボロブドゥールとプランバナナ群の両者は、1991年にUNESCOの「世界遺産」として正式に登録された。それによって、文化財としてだけではなく、観光資源としても大きな付加価値がついた。また、この二つにラトゥボコ（Ratu Boko）宮殿跡を加えた3箇所は、互いに距離はかなり離れてはいるが、現在、「ボロブドゥール・プランバナナ・ラトゥボコ遺跡観光公園有限会社」によ



写真1 地震で倒壊しかけたプランバナナ寺院と外国人（韓国人）観光客
（2006年8月、筆者撮影）

て維持管理運営がなされている。この会社のホームページ上のスローガンでは、文化遺産を保護することと、インドネシア人の国民的アイデンティティを高めることの2点が責務とうたわれている。

プランバナン群は、先の地震に相当な被害がでた。いくつかの塔の先端が崩れ落ちたまま転がっている寺院もある。また、鉄製や木造の足場を組んでかろうじて倒壊を防ぐ補強が施されている。通常なら、塔の中段部にくり抜かれた神像の座まで登れるが、地震後は石塔のまわりに柵をしてぎりぎりまで近づけないような対策がとられている。塔の内部の内部も損傷も激しく、危険で立ち入れない状態だともいわれる。

2. 遺跡公園へ

先にも述べたように、ボロブドゥールやプランバナンを訪れるには、ジョグジャカルタに宿を取り、そこから車で向かうことが多くなる。遺跡公園付近には安価な宿屋もあるし、またジョグジャカルタから路線バスなどを乗り継いでこれらの遺跡公園に行くことは可能である。しかしながら、ジョグジャカルタを含むジャワ島中部の観光には、インフラやホテルの数、観光の“効率”を考えるとジョグジャカルタ宿泊がもっとも一般的な選択である。

ボロブドゥールもプランバナンも遺跡公園全体は広い面積を有するが、全体がフェンスで囲まれている（図1を参照）。自動車で行ってきた観光客が公園に入るには、まず自動車の入場料＝駐車料金が必要になる。料金自体はそれほど高額ではない。7～8人乗りのバンのような車種でも1台5000ルピアで清涼飲料1杯分（表1を参照）、駐車的时间制限はない。

駐車場付近には、土産物や軽飲食を商う売店や屋台が立ち並ぶ。バティックで作ったシャツやスカートなどの軽衣料や編み笠、サンダルなどの皮革製品、木彫や銀細工のアクセサリに玩具、影絵劇の人形、風景画などなど、多種多様な土産が商われている。しかしながら、閉めたままの店も目立つ。かろうじて店を開けていても、売り子が店頭の椅子に腰掛けてうたた寝している時間の

表1 観光関連の諸サービスとその値段

金額	受けられるサービスや商品
Rp.5,000	<ul style="list-style-type: none"> ・ ジョグジャ市内食堂でのコーラ 1 杯 ・ 路傍の屋台のコーヒー 1 杯 ・ ガソリン (レギュラー) 1 リットル ・ 中級のコメ 1 kg ・ 遺跡公園駐車料金 (一般の乗用車) ・ ジョグジャ市内でのインフォーマルなガイドの謝礼 (相場)
Rp.5,000～ 7,000	<ul style="list-style-type: none"> ・ 缶ビール 1 缶
Rp.10,000～ 15,000	<ul style="list-style-type: none"> ・ ジョグジャ市内の食堂で麺類・炒飯・肉ダンゴスープなど 1 皿 ・ ジョグジャ市内ファストフード店のハンバーガー 1 個 ・ 地震後の遺跡公園内売店の 1 日当たりの平均的な売り上げ ・ ジョグジャ市内中心部でのベチャの 1 行程のおよその料金
Rp.20,000	<ul style="list-style-type: none"> ・ バティック布シャツの仕立て職人の工賃 (1 着)
Rp.50,000	<ul style="list-style-type: none"> ・ ベチャ漕ぎの 1 日の手取り (ベチャが自前の場合)
US \$ 10.00 (≒Rp.90,000)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 遺跡公園への外国人の入場料金 (米ドル払い) ・ 到着時ヴィザ (観光目的で 5 日以内の滞在の場合)
Rp.100,000	<ul style="list-style-type: none"> ・ 遺跡公園への外国人の入場料金 (ルピア払い) ・ 地震前の遺跡公園売店の 1 日当たり平均的な売り上げ
Rp.200,000	<ul style="list-style-type: none"> ・ ジャカルタージョグジャカルタ間の特急鉄道特等席料金 (大人一人片道)
US \$ 25.00 (≒Rp.230,000)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 到着時ヴィザの料金 (観光目的で 5 日以上滞在の場合)

(※ジョグジャ＝ジョグジャカルタ)

ほうが長そうなくらいである。外国人観光客が通ると、急に目を開けて気まぐれに呼び込みをするが、客の足を止めるにはいたらない。地震発生前は 1 日 10 万ルピアほどの売り上げがあったが、地震後 3 ヶ月が経った時点で 1 万ルピア程度にまで落ち込んでいるという。かれらの認知では、地震の後に観光客の数は半減し、その後もなかなか回復していない、という。

駐車場から売店や屋台スペースを抜けると遺跡のゾーンに行けるのではない。ゾーンに入るための入場口がある。以外に狭い。ここの料金所で、外国人観光客の場合は10米ドル（2006年8月。この時期でほぼ1110円強）の入場料を払ってチケットをもらう。入場口では、いくつかの言語のガイドを薦められる。ボロボドゥールでもプランバナンでも、またラトゥボコでも、外国人の入場料金はいずれも10米ドルである、この金額は、地震が起こる前の公園内の土産物屋の1日の売り上げにほぼ匹敵し、ジョグジャカルタ市内中心部の食堂で麺類や飯類が7～8皿ほどは食べられる額である。つまり、遺跡付近の観光客相手の零細な土産物売店や公園従業員にとっては十分に価値ある金額といつてよい。

こうして公園の遺跡ゾーンに入ると、広大な敷地が見事に整地されている。よく手入れされた花壇や植え込み、トイレなどの休憩所や売店、小さな博物館などが遺跡の間に点在する。そして、物売りの攻勢に迎えられる。駐車場の売店に比べると、こちらは実に商売熱心である。あちこちに「物売り禁止」の看板が立っているが、あまり実効をとまなっていないようである。

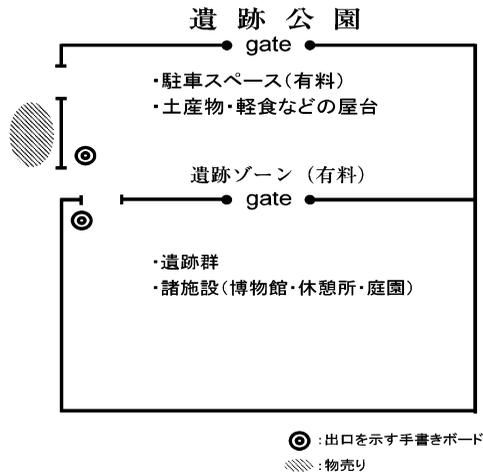


図1 囲い込まれる観光

筆者の見る限り、外国人観光客は、かれらが薦めるような土産物に購買欲をそそられることはなさそうである。「子供がまだ学校に通っていて、地震後、生活が苦しい」、「バントゥル（ジョグジャカルタ州内で地震の被害がもっとも大きかった県）にいる兄が崩れた家の下敷きになって亡くなった」などという者もいる。黙っていると、先方から値段をドンドン下げってくる。

このような遺跡公園の様子を模式的に描くと図1ようになる。観光客は、遺跡公園という塀とゲートで区切られたスペースの中で、遺跡を見物する。こうした状況は、3遺跡のうち圧倒的に訪問者が多いボロブドゥールとプランバナンではほぼ類似している。

3. 抜け穴

以上のような観察から、いくつか指摘したい。まず、遺跡公園は、敷地全体に延々と設置された金網の塀（フェンス）という建造物という物理的な境界によって、また高い金額を必要とするゲートや入場口（料金所）という経済的な境界によって、そして警備員・監視員という装置によって、公園の外とは明確に区切られている。遺跡公園は観光客のために閉じられ囲い込まれた空間と化している。

ボロブドゥールについては、1980年代の修復の過程で、インドネシア政府は遺跡から300メートル内に住む村人を立ち退かせ、その後に遺跡公園として遺跡を主にした広い敷地を塀で囲いこんだ。当時、排除される側の住民の大きな抵抗もあった。史跡公園周辺の住民には零細な農民が圧倒的に多いのに、土地を退去しても土産物や飲食物を「自由に売ることができない」[『毎日新聞』2006年2月12日]。農業も商売に転職することも容易ではない。この遺跡公園は、周囲の地域から切り離されることで成り立ったともいえるのかもしれない。

しかしながら、この空間は完全に閉ざされているとばかりは言えない。物売り禁止の遺跡ゾーンでも、手に持てるだけの限られた数の土産物をもった男女



写真2 外国人観光客と物売り（ボロブドゥール遺跡公園内にて）
（2006年8月、Murdiono氏撮影）

の立ち売りが多数いて、外国人観光客に提供しようとする。また、警備員や従業にキャンデー1粒、タバコ1本のばら売りをし、ホームメイドの餅や揚げ物の簡単なスナックを商う行商人もいる。それはほぼ中年の女性に限られ、長年の洗濯と日光乾燥によって色落ちしたバティック（ろうけつ染めの布）のサロン（腰布）とクバヤ（ブラウス）というジャワの衣装を着て、ビーチサンダルを履いている。また、ジャワ語で金銭をねだる高齢の女性にも出くわすことがある。彼女らも、スナック売りの女性と同様の衣装を身につけている。また、公園の遺跡ゾーンからフェンスを通過して外の土産物屋台にぬけられるような「工夫」もされている。

つまり、遺跡公園は観光（とくに多国籍的、トランスナショナルな）のために囲い込まれた空間でありながらも、まさにその内側において在地の人々の細々とした営みがみられる。つまり、ここにおいて、この地の人々と、かれらの生活から地理的距離にして数千キロ離れ、経済的距離にして10米ドルの価値に大きな違いがあるところからやってきた外国人観光客との最小の接点があ



写真3 遺跡公園フェンス外側の土産物売り（プランバナンにて）
（2006年8月、筆者撮影）

る。

ただ、商いとしては、筆者の観察の範囲では、あまり成り立っていないように見える。零細な土産物屋や売り子が商う商品は、作りなどにいささか安っぽいやところもあってか、また陳列されている間に日焼けやほこりなどで質が劣化していることも多く、外国旅行慣れした現代の欧米や日本など先進国からの観光客の嗜好とはもはやかけ離れてしまっている。売り手がしばしば口にする、ジャワあるいはインドネシアの「伝統的な」という文句も、ジョグジャカルタやジャカルタなどの市内の高級品を扱う綺麗なショップか、職人や芸術家が実演してみせる工房やアトリエか、それともいかにもそれらしい古色蒼然たる骨董品を扱う専門店においてこそ、価値をもつものかもしれない。「伝統的な」という文句はここでは威力を発揮しない。売りたい側とその相手との間に嗜好の大きなずれが生じていると筆者には見える。しかしながら、他方では、国際観光の最前線として、このような土産物類がどこでどのようにして誰によって

生産されているのか、いわば川下から国際観光を追跡して見る必要がある。

V. 今後のために

ここまで書き留めてきたような事柄にもとづいて、簡単に今後の課題をまとめておく。課題には2つある。一つは筆者の観光景観の形成についてであり、他の一つはジョグジャカルタやジャワ島中部地域とその人々の地震被害からの復活というより切実な課題である。

前者について、筆者は二つの点を指摘しておきたい。まず、観光は、他の形態の資本主義的生産と同じく、商品化ということから免れられない。それゆえ、観光地はそれ自体で「真正な」ものというよりも、社会的に構築されていくのである。そうしてできたものが維持されるには、観光客が観光地を訪れ、ローカルな人々と相互に作用をもたねばならない。ジョグジャカルタ・ジャワ島中部地域を取り上げて、この相互作用の過程を記述することが一つのテーマになる。そして、観光に関わるさまざまなローカルな人々や組織と国際観光客との相互関係によって創り出される「途上国」における国際観光の景観を描くことが第二のテーマである。

もう一方の地震からの復興についても今後の課題である。地震直後の時点でも、ジョグジャカルタ特別州全体では、物的な損害だけでも「公共建築物・政府の財産・民家など約2.5兆ルピア（約325億円…筆者注）」[Kompas (on-line)、2006年5月29日]に達するという。観光産業を形成する広い裾野は広く、ホテルや代理店、民芸品の製造から販売、交通機関や飲食店、そしてベチャこぎや屋台の物売りに至るまで打撃を受けている。一般に大規模災害はより零細な人々により大きな影響を与える。

元々が零細な商人やさらにその周辺に位置する流し売り、土産物製造業者やその労働者などなどの観光に関わる人々が、地震後の困窮の中でさらに下方に

貧困化する可能性が大いにある。そうした人々が、世界遺産や文化財を主な資源とする国際観光とどのように切り結ばれていくのか。トランスナショナルな観光現象が、ジャワの「小さき民」（ジャワ語で言う「ウォンチリツ *wong cilik*」）の主体的な生活にどのような意味をもつのか。これらの点を考察したい。

注

- 1) ヨグヤカルタ *Yogyakarta* が正式の名称であるが、本稿ではよく使われる通名、ジョグジャカルタ（またはその短縮形のジョグジャ）を用いる。
- 2) 1970年前後には、バリ島がネパールと並んで、当時のカウンターカルチャー世代の若者のバックパック旅行の有力な目的地であった。
- 3) 1999年に東南アジア諸国を訪れた外国人観光客は約3,700万人（世界の5.3%、金額で5.8%）であった。
- 4) 主要13空海港以外からの入国には、あらかじめ在外インドネシア公館でヴィザを取得しておかなければならない。
- 5) 2000年の人口センサスにおける「自己申告」による帰属エスニック集団では、「ジャワ人」とした人口が約8,400万人、総人口の約42%を占め、最大である。ちなみに、2番目に多い「スダ人」（3,100万人、15%）とはかなりの開きがある [Suryadinata, *et al.* 2003, p.7 他]。

参考文献

Budihardjo, Eko (ed.)

1997 *Preservation and Conservation of Cultural Heritage in Indonesia*, Gajah Mada University Press, Yogyakarta.

Dahles, Heidi

2001 *Tourism, Heritage and National Culture in Java: Dilemma of a Local Community*, Curzon, Richmond.

Indonesian Tourist Promotion Board

1992 *Discover Indonesia A travel Guide to the Indonesian Archipelago (The Official Guidebook of the Indonesian Tourist Promotion Board)*, Bali Intermedia, Jakarta.

Peleggi, Maurizio

1996 National Heritage and Global Tourism in Thailand, *Annals of Tourism Research* 23-2, pp.432-448.

杓谷茂樹

2005 「観光と考古学—マヤ遺跡公園を巡ってのせめぎ合い—」『総合的現象としての観光』、江口信清（編）pp.81-102、晃洋書房。

Suryadinata, L., E.N.Arifin & A. Ananta

2003 *Indonesia's Population: Ethnicity and Religion in a Changing Political Landscape*, Institute of Southeast Asian Studies, Singapore.

『じゃかるた新聞』（ネット版）、2006年8月1日、「バティック生産を再開 中部ジャワ地震被災地パントウル県イモギリ」

『じゃかるた新聞』（ネット版）、2006年9月14日、「観光なくして復興なし」

Kompas (on-line), 2006年5月29日, “Kerugian akibat gempa di DIY Rp 2, 5 triliun”,

『毎日新聞』2006年2月12日、「住民参画求め続け」

『毎日新聞』2006年11月28日、「果たされぬ約束」

Media Indonesia (on-line), 2006年4月21日, “Kunjungan wisman ditargetkan 10 juta pada 2009”.

<http://www.aseancentre.or.jp>

<http://www.borobudurpark.com>